



▲ヒゲガビチョウ 性・齢不明・綾川町 2016.11.3 PHOTO©岩田篤志(鳥類標識調査による一時的な捕獲、以下同じ)

四国でのみ確認されている外来種

ヒゲガビチョウ *Garrulax cineraceus* はソウシチョウと同じくチメドリ科の外来種。本来の生息地は中国中・南部からミャンマー北部・インド北西部です(MacKinnon & Phillipps, 2000)。日本では四国、高知県と愛媛県で繁殖しています(日本鳥学会, 2012)。

最も古い観察記録は1998年9月(愛媛県愛南町)、高知県では2000年8月(土佐町)です。2005年4～5月の聴取調査では愛媛県・高知県で9市町・25例が確認されており、確認地点は低標高地から標高1200m付近まで。この時点でかなりの広がりを見せていました(濱田ら, 2006)。図鑑では標高200-2570m、多くは標高1800m以下に生息するとされていますので(MacKinnon & Phillipps, 2000)、四国全域で生息可能と考えてよさそうです。

ソウシチョウが狭い場所で高密度で生息するのに対し、ヒゲガビチョウは低密度で広く分布しているとのことであり(四国外来鳥類研究会, 2007)、ヒゲガビチョウの方が「広がりやすさ」では有利なのかもしれません。

なお、本来の生息地では下記の3亜種が認められています。

- ・ *G. c. cineraceus* 最も西に分布する基亜種、羽色全体が淡色で、頭部に赤栗色部がない。
- ・ *G. c. strenuus* 中国南西部に分布、基亜種よりもやや濃色だが、頭部の褐色部は比較的淡色で不明瞭
- ・ *G. c. cinereiceps* 中国国南東部に広く分布、全体に濃色で頭部の赤栗色部が明瞭

これについて、2006年に高知県で2個体を鳥類標識調査により調査した結果では、頭部の赤栗色部が明瞭であることから亜種 *cinereiceps* の可能性が高い(片岡ら, 2006)とし、また日本に侵入しているのはこの亜種として掲載している図鑑(Brazil, 2009)もあります。

香川県へも侵入

香川県でも様々な外来種が確認されますが、ドバトなどの古い外来種を除き、完全に定着・拡大している外来種の小鳥類はソウシチョウとハッカチョウくらいです。ソウシチョウは確認された時期・場所から、2004年にレオマワールドから台風で逃げた約150羽が起源であるのがほぼ確実。ハッカチョウも綾歌町での繁殖個体が分散しており、これもレオマワールドから逃げ出した個体が原因ではないかと考えられています。このように、香川県の外来鳥類は、一定数の個体数がまとまって逃げたことが、定着の契機となっています。

一方、ヒゲガビチョウは愛媛県・高知県で分布を拡大してきたもの。このため、まずは香川県西部で確認されるだろうと考えていましたが、2006年・2007年に諸報告が出て以降も県内での観察情報がないため、香川県にはまだまだ侵入していないのだろうと筆者(岩田)は考えていました。

ところが2015年10月、香川県にソウシチョウ調査に訪れた県外の研究者によって、綾川町大高見峰でヒゲ

ガビチョウ 5羽が確認されました(天野私信, 未発表)。よりによって香川県の真ん中であり、既にこの地域以西では侵入している可能性が高くなりました。

その後、県内の野鳥観察・撮影者からの正式な報告がないまま、「まんのう町尾ノ瀬山でもいた」「〇〇で見た」という話を聴くことが多くなり、少なくとも香川県中西部では完全に定着しているようです。またソウシチョウの例からみると高松市公湊公園や藤尾神社でも、近いうちに確認されるのではないかと思います。

香川県での調査が必要

継続調査をするため、筆者も 2015 年に確認された大高見峰で鳥類標識調査を実施し、2016 年 11 月・12 月にそれぞれ 1 羽を捕獲・放鳥しました。四国の他地域では広葉樹の二次林、スギ・ヒノキ人工林、落葉広葉樹天然林、モウソウチク林などで記録されていますが(濱田ら, 2006)、大高見峰の調査地もスギが植林された谷に隣接するササ林(標高 177m 地点)であり、スギ林周辺に生息しているようでした。

しかし 2017 年 1 月には声も聴けず、2017 年 4 月には再び声を確認するようになりました。まだ 1 シーズンだけですが、厳冬期には移動している可能性があります。

なお、筆者が捕獲したヒゲガビチョウも頭部の赤栗色部が明瞭ですので、亜種 *cinereiceps* の可能性が高く、そうすると愛媛県・高知県と同亜種ということになり、分布拡大してきたという可能性を補強することになります。

10 年程度の間に香川県へヒゲガビチョウが侵入したとすれば、今後の 10 年程度の間に、県内各地で観察される程分布を拡大すると思われます。しかし外来鳥類を駆除することは極めて難しく、現時点では手の打ちようがありません。

その中で、私たちに「できること」は、記録を残し、同じ過ちを繰り返さないことです。

いつ、どこに、何羽程度がいるのか。実は見つけやすいハッカチョウ、注目度が高いソウシチョウと比較して、県内のヒゲガビチョウについては、まだほとんど報告されていないにも関わらず、県内のバードウォッチャーの多くは「最近よく見る鳥」として慣れつつあります。

今、この時が、ヒゲガビチョウの分布拡大の激動期にあたります。いずれ正式な報告にまとめたいとも思いますので、ぜひ香川県でヒゲガビチョウを観察したら、その情報を本会までお寄せください。



▲ヒゲガビチョウ 性・齢不明・綾川町 2016.12.31
翼は丸く、あまり長距離を渡りそうにない。



▲ヒゲガビチョウ 性・齢不明・綾川町 2016.12.31
尾は特徴的な模様がある。

(参考文献)

- ・2006, 濱田哲暁・佐藤重穂・岡井義明. 外来種ヒゲガビチョウ *Garrulax cineraceus* の四国における記録と繁殖. 日本鳥学会誌 55: 105-109.
- ・2006, 片岡宣彦・梶田学・梶田あまね. 新たな移入種 ヒゲガビチョウ -四国山奥の隠者-, 日本鳥学会 2006 年度大会ポスター発表
- ・2000, MacKinnon, J. and Phillipps, K. A Field Guide to the Birds of China. Oxford University Press
- ・2012, 日本鳥類目録改訂第 7 版, 日本鳥学会
- ・2007, 四国外来鳥類研究会. 四国地域におけるチメドリ科外来鳥類の定着実態の解明